

しんぶん「福島からの発信」
読者登録済みのみなさまへ

「被災地フクシマの旅」実行委員会

読者登録いただきありがとうございます。

前号を発行して間もないのですが、「請戸小学校物語」（全4ページ）を当時の先生の証言をもとに、作成いたしましたので、無料で一部郵送させていただきます。。

お読みになり、津波と原発事故という途方もない事故に直面したこともたちに思いをはせていただければ幸いです。

お送りしたしんぶんは転載、コピー、引用など自由ですので、周りの方に福島のことをお伝えするときなどにも、ご利用ください。

なお、一部以上ご希望の場合には無料紙をご覧の上、下記の住所またはアドレスにお申し込みください。一部100円のカンパでお送りいたします（送料は当方で負担。カンパは注文新聞到着後切手または指定口座へ振込みでお願いします）

◎宛先

〒976-0006 福島県相馬市石上字南白髭320
NPO法人野馬土内 「被災地フクシマの旅」実行委員会

◎メールアドレス info_nomado@fork.ocn.ne.jp

*整理上、件名に「しんぶん希望」と記載願います。

ご本人のご住所、お名前を必ずお書きください。

よろしく願いいたします。

被災者が作る原発に一番近い新聞です。

しんぶん 福島からの発信

編集発行

「被災地フクシマの旅」

実行委員会

相馬市石上字南白髭320

「野馬土」内

電話 0244-26-8437



その時から私たちは…

大平山から見下ろす請戸の街

福島県・浪江町請戸小学校校物語

この物語は、震災当時請戸小学校に在籍していた先生の、記憶に基づいた短編小説です。登場人物や名前なども架空のものです。

◇原作 齋藤 貴義
◇脚色・絵 村松 孝一

最近この地方は、数日にわたって小さな地震が繰り返し発生していた。「大きな地震が来る前触れかな・・・」そして、2011年3月11日

私は浪江町の請戸漁港に近い請戸小学校で4年生の子供達に算数を教えていた。私が黒板に問題を書く。
「この問題の答えが分かったひと？」
「はい、先生！わかった！」
「僕も！」
お昼の給食をしつかり食べ終えた子供たちは元気に手をあげ、答えた。そんな子供達の元気な声を聴くのが私にとって何よりうれしい。先生になってまだ浅い

私にとって、新鮮な毎日だ。体育館からは校歌が聴こえてきた。卒業式の練習だ。
永遠に
潮騒渡る
海近い
平和な土に
巖と立つ
われらが母校
ああ請戸小学校
(請戸小学校歌1番)
体育館では5年生が卒業式の準備を行っていた。6年生の子供達は間もなくこの学校を巣立ち中学生



となる。廊下ですれ違ふと心なしか、ませた嬉しそうな、少し寂しそうなこらえきれない表情をみせる子もいる。
チョークを持って次の問題を書こうとした時、ふわっと世界が揺らいた。その後、教室全体が横や縦に揺れた。した。
「きゃー！」
「揺れてる！」
子供達が悲鳴をあげる。地震だ！それもかなり大きい。
「みんな机の下に！机の下で丸くなりな

さい！」
と指示した。子供達が一斉に机の下に入った。私も教卓の下で丸くなった。揺れは収まらないどころか激しくなっていく。このまま校舎が倒れるんじゃないかと思つた。棚から物が落ちて割れている。「怖い！」

「えーん！」
机の下でパイプを強く握りしめながら子供達が泣いている。「大丈夫、大丈夫だ！みんなしっかり丸くなつてなさい！」
と言つたが、私も助からないかもしれないと震えた。激しい揺れは長時間続いた。やつと少し収まったところで私も子供も机から出た。そうしたら、また強い揺れが起きて再び机の下に隠れることになった。まだ揺れは続いているが、教室のスピーカーから校内放送が流れた。

「いま大きな地震が起きています！先生方は子ども達の安全を確認して児童を全員校庭に集合させてください！」

私がひるんでいては仕方がない。これまでの避難訓練を思い出しながら素早く行動に移す。

「皆さん、今から校庭に避難します。落ちついて列をつくつて避難すること」と指示した。子供達は動転して泣き止まない。泣いている

子の頭を撫でながらみんなで教室の外に出た。他の学年も先生に引率されながら外に出てきていた。

すでに下校していた1年生を除く全員が校庭に集められた。「出席番号6番、志賀勝朋！」

「ハイ！」

「よし！」

「出席番号7番……」
校庭では点呼が行われた。途中で何度も地面が揺れた。子供どもたちは、全員そろつた。「先生、集まってく

ださい」

教職員が集められ、青田校長から指示があつた。「大地震の後には必ず津波が来ます。学

校にいては危険です。先生方は児童を連れて急いで大平山に避難して下さい」

校長は教員達に小学校から1キロ以上離れた大平山への避難を指示した。

そのとき校長は浪江町がつくつたハザードマップを思い出していた。大地震の後、に大津波が来たら、

この小学校も浸水する。この想定の下にちようど小学校から大平山への避難を想定した計画を立てていたところだった。

その計画をよもや自分が実行するとは思ひもよらなかつただろうな。

校長はそんなことはみじんも見せず話を続けた。

「私は、まだここに残ります。各先生方は子どもたちと先に避難して下さい」

子どもたちには論ずように、

「みんな、今から大平山に避難します。落ちついて列をつくつて、先生から離れないようにね」

何か災害が起きたとき、学校は避難所に指定されている。今度も学校に避難してくる人がいるだろう。保護者も子供を迎えに来る。保護者には、「子供たちは私たち

が守ります。もうすでに避難を始めています。あなたたちも大平山へ避難してください」

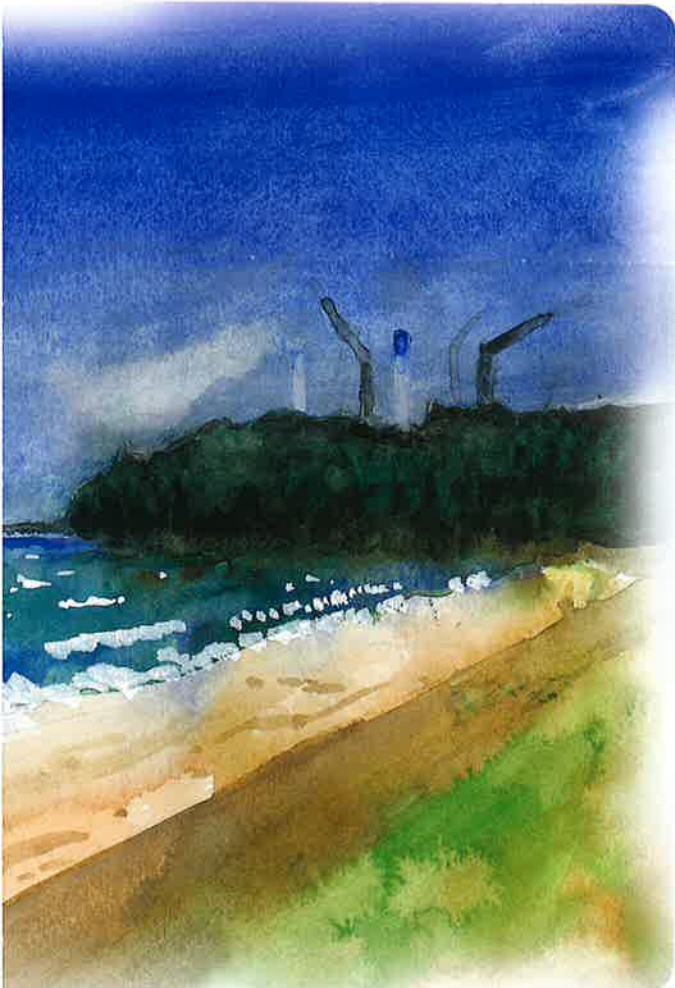
と声をかけた。

学年ごとに列をつくつて、そのあいだに私たち先生が入つた。途中、家が倒壊していたり屋根瓦が落ちていたりして危険な道だった。子どもたちの列は自然と上級生が下級生の手を引き、励ましあえる形になった。みんな必死で歩いた。

崩れ落ちた家並みが終わると、田んぼのあぜ道に入る。ここで浜街道と交差する。街道は避難する車が隙間なく走っている。これでは横断することができない。私は、道に飛び出し車を止めた。

「ばかやろう、危ねーべ、この！」

「すみません、子どもたちを通してください」



私は、子どもを守ることに必死だった。浜街道を渡り切るとそこは田んぼが広がっている。あぜ道を歩かなければならない。車椅子の子もいた。この道で車椅子は押せない。私とその子を背負うと、新妻先生が車椅子を担いでくれた。

背負った善照君は、ずしりと重い。日頃の運動不足を悔やんだ。とにかく歩くしかない。

背負うのも、限界と感じた頃に大平山の裾にたどり着いた。「しまった!」

集団の前に行く、新妻先生の大声が聞こえた。

「新妻先生どうしました?」

「広い用水掘りがある。橋が見当たらない。これでは山に入れない。」

「わたり板を探すか」

「いや、そんな時間はない」



私の頭の中は真っ白になってしまった。どうする。ああ、何も浮かばない。

「先生、こつち、こつち!」

「えっ?」

私のクラスの宏志の大声で我に返った。

「前に、お父さんに教えてもらったんだ。山に入れるよ」

「そうか、宏志はお父さんと野球のトレーニングでここに來てるんだ」

私は、ここでうろたえたことを子どもたちに悟られないよ

うに、努めて明るい表情で子どもたちを見回した。

宏志の指さす方向に歩き始めると500mほどで、小さな橋があった。そこを渡ると山に入る道がずっと伸びていた。

「気をつけて」
大内先生はすぐ戻ってきた。
「海!津波で請戸が全部海に飲まれていきます!私たちが走ってきた道も田んぼもすっかり無くなってしまった!」

と青ざめた声でささやいた。そんな光景は子供達には見せられない。まだ請戸には避難できなかつた人が大勢残っていたのではないか。

◇

私たちは、大平山をかき分けて国道6号線を目指した。少しずつ休憩を取りながら進む。善照君は力のある先生が交代で背負ってくれた。

「先生、雪…」

16時になった頃、雪が降り始めた。

「先生、寒い。足が痛い」

「もう歩けない」

子ども達の体力も限界に来ていた。

「もう少し、もう少し歩けば国道に出る。そしたら避難所から迎えに来てくれる。頑張ろうな」

この寒さの中、ここにどまつてはいられない。子どもたちを励まし何とか前へ進むしかない。しばらくすると、車の走る音が聞こえてきた。

「やったー!」

ようやくみんなが国道6号線まで出られた。しかし浪江町のどこが安全か分からない。

「私が町役場に電話してみます」

たった一人、携帯を持っていた天野先生が町役場に救援の電話を掛けてみたが、役場も大混乱状態ですべても助けに行けないとのことだった。

「ここまで頑張ってきたのに」

「先生どうしたの?」

「いや、今連絡とっているからな、もう

「先生どうしたの?」

「いや、今連絡とっているからな、もう

「先生どうしたの?」

「いや、今連絡とっているからな、もう

「先生どうしたの?」

「いや、今連絡とっているからな、もう

「先生どうしたの?」

「いや、今連絡とっているからな、もう

少しだ」
 そこに運よく大型トラックが通りかかった。先生や子供達が大きく手を振って、「助けてー!」
 「止まってー!」
 タイヤを軋ませてトラックは停まってくれた。
 「みんなどうぞだのお?」
 運転台のドアが開くと強面のおじさんが降りてきた。
 「請戸の浜からこの山道を越えて避難してきたところです。子ども達を役場の避難所まで運んでくれないか?」
 「よし分かった、みんなおらのトラックに乗っだらよがんばえ。なーに、ちよつど運ぶだけだべえ!」
 「おじさんありがとう」
 「わー、良かった」
 「もう死にそうだった」
 「早くお母さんに会いたい!」
 「おなかすいたよね」

子どもたちは、おもいおもいの気持ち言いながら喜び合っていた。
 このトラックは、いわきから仕事で北へ向かっていたところだったという。幸いなことに、この大型トラックには子ども達はもちろん、ここにいる全員が乗ることができた。町役場避難所は車で走ればすぐである。

◇

避難所についた子どもたちは家族と再会できた。震災発生前に下校していた一年生の無事も確認できて胸をなで下した。
 家族と再会できた子で、自宅が戻れる状態の子は、一人、二人と避難所から帰って行った。
 克義くん家では、家族全員がながされたことを後から知らされた。なんということだ!
 子供たちの引き渡しが一段落すると、今度は自分たちのことである。その時、気が付いた。
 「あ、車がない。家の鍵もない。帰れないじゃないか」
 家族が引き取りに来られない子ども達と避難所泊まりになった。広い体育館は停電で暗く、寒さが厳しかった。でも私は子供たちを無事避難させたという達成感から、寒さも、床板の硬さも気にならなかった。

◇

翌12日、土曜日の朝がきた。避難所に残った先生たちで軽く、朝のミーティングをした。最後に校長は、
 「それでは、月曜日はこの避難所に出勤してください。それでは、今日は解散しなさい。」
 このとき、驚きの情報が避難所にもたらされた。総理大臣名で、津島に避難しろという指示が出されたのである。
 「原発だ!」



避難所は、一瞬にして悲鳴が上がり、罵声が飛び交った。避難所の町民は、ばらばらになった。津波の避難訓練はあっても、原発事故の避難訓練はなかった。みんなどうしていいかわからない。「わー逃げるゾ!」
 「車はあるか!」
 「バスはどうなっているんだ!」

◇

この時から、再避難を始める請戸の子供たちを含め、すべての町民にとって、これまで経験したことのない苦しみの始まりになった。
 その後、避難のため全国を転々とした子どもたちは二度と故郷に戻ることができなくなった。
 私は浪江に戻るこができた。
 原発事故から8年がたった今、請戸の子供たちはどこにいて、どんな気持ちで生活しているのか。
 美しい
 未来の夢に
 この翼
 羽ばたく日まで
 励まなん
 われらが母校
 ああ請戸小学校
 (請戸小学校歌2番)
 帰ることをあきらめ、かの地に根を下ろしはじめた人も多くなっていると聞いた。
 今、人の住めない請戸の街は復興の重機の音と大型トラックの行き交う場所となっている。